

岡山市長賞(中学校・最優秀賞)

新聞感想文の部

一人の少女の叫びから

倉敷市・玉島北中3年 山田 千晶

正直なところ、普段あまり新聞など開かない。その私の目に飛びこんできた文言「本とペンが一番強い武器」「武器」とは物騒な言葉だ。私が考える武器とは、ナイフや鉄砲・ミサイル等相手を攻撃しダメージを与えるものだからだ。

日本に住む私は、何不自由のない環境の下、小学校入学から中学校卒業までの計九年間、「教育の義務」に守られて、学校に通い勉強をすることが出来ている。この当たり前のことが当たり前でない国や地域があることを知っていたが、それは貧困や戦争といった理由からで、男尊女卑の考えや宗教的思想により教育を受けることが出来ない子どもたちがいることを初めて知った。

何故、女子が教育を受けてはいけないのだろうか？一説によれば「欧米の教育はみだらであるから」や「女は男より賢くなる必要はなく、家に居ればよい」と等という理由からだそうだ。全く納得のいかない理由に憤りを感じ、そして同時に「教育を受ける自由」を訴える人間に銃弾を向けるという行為に激しい怒りを覚えた。

小学校の頃、「子どもの権利条約」について教えてもらったことがある。そこには、「生きる権利」「守られる権利」「育つ権利」「参加する権利」

の四つの柱となる権利がうたわれており、18才以下の子どもは保護されるようになってきている。マララさんの母国パキスタンもその条約に批准しているのに、どうして女子は堂々と教育を受けられず、マララさんは撃たれたのか？どうして「何で？」という言葉ばかり

で、思想や宗教的問題がからんでくる、私にはもう何も出来ないのかも…というもどかしさを感じた。マララさんは、「自分を銃撃した過激派の子どもたちにも教育を受けさせてやりたい。」と話していた。ある意味、子供は残酷な動物である。歯に

「本とペンが一番強い武器」

マララさんは「一人権を求め、何ものも人がロリストに殺れ、何人ももが殺るな」という言葉を叫び、その一瞬に自身を撃たれ、テロリストは私や友だちを撃つで黙らせたいけれど、私たちは止められない」と叫び口を塞がれ、口を塞がれた。

マララさん 国連で演説

マララさんは「一人権を求め、何ものも人がロリストに殺れ、何人ももが殺るな」という言葉を叫び、その一瞬に自身を撃たれ、テロリストは私や友だちを撃つで黙らせたいけれど、私たちは止められない」と叫び口を塞がれ、口を塞がれた。

2013年7月14日付 朝日新聞

衣せぬ発言は人の心を踏みにじり、ケンカをすれば加減を知らず大ケガをさせてしまうこともある。小さな子ども頃から武器を与えられ、人を傷つけることを良しと教えられたら、どんな恐ろしい人間ができるだろう。だからこそ、子どもはきちんと教育を受け、物事の善し悪しを判断できるように勉強をしなければいけないのだと思う。勉強し色々なことを知り、知識を身につけることで、人は将来なりたいたいものに近づき、世の中で役に立つ人間として働き生きていけるのだと思う。今、私に出来ることは何だろうか？この記事が、もし大人の発言であつたならばと見過ごしていたかもしれない。たった二つしか歳の違わないマララさんの毅然たる態度、勇敢な発言に心を突き動かされたような気がした。まずは、「世界には平等に教育を受けることが出来ない人たちがいる」という事実を知ること。そして私自身一生懸命勉学に励み、いつかすべての子どもたちが教育を受けることができるように発信・支持する努力をしていかなければいけない。今なら理解できる、マララさんの言葉。私たちが子どもは、「本とペン」を武器に、世界を変えていけるんじゃないかと。

寸評

マララさんの記事の見出しに着目し、世界中の女性が教育を受けることの大切さを考え

るだけでなく、非暴力の意義を洞察しています。感想文から、卓越した言語表現力が伝わってきます。